校註 日本文學大系 第五卷

落窪物語
狹衣物語
住吉物語
石清水物語

校註

日本文學大系

第五卷

昭和二年八月八日印刷
昭和二年八月十一日發行

（非賣品）

日本文學大系
第五卷

編輯兼發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七二一八八三番
三六八六番
振替東京五二二九八番

解題

落窪物語

文學博士　尾上八郎

平安朝時代に現はれて、急速度で發展し、しかも急速度で、衰頽した物語は、伊勢、竹取を先とし、源氏を中とし、濱松中納言、夜半のねざめ等を殿として、當時には喝采を博し、後世には規範となつた。最初のものは浪漫的の匂の強いものであつたが、漸次寫實的に傾いて來た。この寫實的傾向の、ことに著しく現はれたものに、落窪物語がある。

落窪物語は、繼母と繼子との關係を寫し出した家庭の物語である。男の通ふ女が多いと、おのづから、嫡妻腹と妾腹との子女がある。これから、偏愛も起り、虐待の事實も生ずる。當時の男女の關係で、かくあるのは、自然の事である。現存のものではないが、住吉物語が、すでにこれを材料として居たやうである。この以外にも猶あつたであらう。落窪物語は、それらを受けたも

のと考へられる。

落窪物語の作者は分らない。古くは、源順といつたこともあつた。それは、順が天暦頃の和漢に通じた才人であつたから、竹取物語も、宇津保物語も、これも、その著としたのであらう。が畢竟當推量で、確たる根據もないのである。この以外に、何も傳へるところがないから、この後確證があらはれぬ限り、この物語は、何人の作か不明である。

著作の時代も明瞭でない。賀茂眞淵は、「冷泉院の比に作りなして、中に、道賴のおほい殿といふは忠平公をや思ひけむ。御子たちの官の競ひざまいとよく似たり。」と云つてゐる。忠平の子どもの官位の關係から、冷泉院の時代の作と極めたのは、故藤岡博士の說の如く、淺薄な類似を、歷史的事實に求めたもので、穿鑿に過ぎてゐる。松本琴園は、村上時代より下らないであらうといひ、先師中村秋香先生は、「その文體によるに、圓融、花山以前のものたるは疑なく……されど又村上、冷泉など、確かにその時代を示すべきにあらず。只おほよそに廣く、その時代に成れるものと見てあるべし。」と云はれたのは、村上、冷泉、圓融、花山の閒のものとするのであつて、穩健ではあるが、甚だ茫漠としてゐる。文中の引歌に、拾遺和歌集のがあるのを、先生は大成の中に示されてある。これは、偶然拾遺集中にある歌が取られたのか、或は撰集以前、すでに世に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

流布してゐたのが用ゐられたのか不明である。その歌は、萬葉集の歌の語句の些か變つたのと、敦忠の、百人一首にもある、「あひみての後の心に。」といふのと、猶類歌として見るべき、或は見ずとも可なるべき程度のものとであるが、最初のは萬葉集のを、撰集以前に訛りつゝ世に廣く傳へてゐたものかも知れぬ。殘の敦忠のも、同じくすでに世に知られたものかも計られない。しかし記錄を主とすると、その歌は、すでに拾遺抄にあるものである。和田英松博士の說によると、拾遺抄は、長德三年から長保元年までの間に成り、拾遺集は、寬弘二年から五年までの間の撰であるといふ。記錄に固執すると、この物語は、長保元年以後か、寬弘五年以後かの作であらねばならぬ。

轉じて、枕草子を見ると、「交野の少將もどきたる落窪の少將などは、いとをかし。」といふ文がある。枕草子には、長保二、三年までの記事が見える。これにかく載つて居る以上は、この物語は、大體長保以前のものであるべきである。

更に、落窪物語と源氏物語とは、多くの關係がある。友人長谷川福平氏が考證したところによると、落窪の姫君と紫上とが繼母の愛をうけぬ事、共に父の賀を盛大に行ふ事、繼母の女の壻の藏人の少將、髯黑の大將が離れ去る事、賀茂祭の日の車爭の事等、中には偶合と考へられるもの

もあるが、猶套襲と改造とは、歴々として徵すべきもある。故藤岡先生も、猶この外の類似を擧げてゐられる。源氏の著作の時日は明らかにし得ないが、猶寛弘附近たることは認容せられてゐる。しかすれば、落窪物語は、源氏以前、寛弘以前に出來てゐなければならぬ。以上を總括すると、落窪物語の著作は、寛弘以前であるはいふまでもなく、更に長保二、三年以前のものである。しかも、それを遡る事は、多くないと云ふべきであらう。

この物語の主人公は、云ふまでもなく、落窪の姫君である。この人を、作者は、まづ王家統流腹として描き出した。それは、凡俗でなく、高貴の人の胤である。從つて寛容で、從順で、人を容れ、人に忤はず、特に操守するところはないが、また猥りに人に許すほどでもない。萬事中庸に居て、氣品のあるのを現はすのに都合がいいからである。この甚しく悲しまぬと同時に、烈しくも喜ばない、消極的であり、退嬰的であり、煮え切らず無抵抗であるに對して、我執が強く感情が強く、利己的で、進取的で、負け嫌ひな北の方を寫し出した。從つて此の人は、北の方の極端な憎に逢ふ。これは、只繼子であるから憎むといふ單純な動機に起因してはゐないと考へられる。この兩者の反對の性格を本として、作者は順次に記述の筆を進めて行く。先づ姫君の性格を寫すに、作者は種々寛容な、中庸的な語を以てする。阿漕が、三の君の仕はれ人となつて、姫君

を離れるのを悲しむと、「何か、同じところに住まむ限は、同じ事と見てむ。衣などの見苦しかりつるに、中々嬉しうなむ。」と云つて澄ましてゐる。又北の方が鏡を買つても箱がないので姫君のを取つて、麁末な代をよこすと、阿漕は怒るが、姫は、「さはないひそ。賜はりぬ。げにいとよう侍り。」とのみ云つて居る。また帶刀が思ひがけなく、姫君の少將への文を落して、人に取られたのをも、叱責せず、少將が返事のないのを怪しんで問ふと、「北の方のおはしつる程に。」とのみ云ふ。少將が、北の方の、「落窪。」と云つたのを聞いて、「何の名ぞ。」と怪しむと、たゞ、「いさ。」とばかり云ふ。而して、卻つて少將に、「落窪の君とは、此の人の名を云ひけるなりけり。我がいひつるを、いかに恥かしと思ふらむといとほし。」と思はせてゐる。猶縫物を、北の方から甚しく責められるのを、少將は憤慨して、「縫ひさして臥し給ひて、北の方、例の腹立てさせたまへ。」といつても、姫君は、「腹だちたまふを見るがいと苦しきなり。」と答へて、無抵抗主義をよく發揮してゐる。從つて、この虐待を憤慨して報復の念に燃え立つたのは、この人でなくて夫の中將である。清水で、車や部屋に就いて、散々に北の方をいぢめると、姫君は、「いと心憂く、けしからずはおはせしと、大臣後に聞き給はむ事もぞある。」と、さすがに繼母の方へは同情してゐないが、父の方へは遠慮してゐる。そして、早く父には、自分の出世した事を知らせたい。「夜中曉の事も知ら

ぬを見奉らでや止みなむと、心細く」思つてゐる。しかし、祭見物の時、先方の車の人を辱しめた事があまりに烈しかつたので、今度は北の方へ同情して歎くと、衛門が、「痛くな思しそ。」と慰める。すると、姫君は珍らしく激語して、「いと胸きたなかりけり。我が人にはあらで督の君の人になりね。それこそ、かく物は執念く思ひいへ。」と云つた。中納言が三條殿を作り出したのを、弟が此方にあるので、衛門督が奪はうとすると、それに贊成顔な衛門の態度を非難して、「また、いかなる事をかし出でたまはむ。衛門こそ、けしからずなりにたれ、たゞ、いひはやす樣に、いみじき御心を。」と云ふ。而して、「我が身さいなまるゝかし。」と歎く。更に、「親の歎き給ふらむは罪いと恐ろしく、かくし給ふことを妨げ給へば、歎かせ奉るが心憂きこと。」と悲しむ。親に知られてから、八講だの、七十賀だの、樣々の事をして父を慰める。その後にも、讓られたものも還して、北の方にも、兄弟にも厚くする。父が失せて後、その家から歸らせようとして、大將がはやく歸らないと、また繼母に部屋に閉ぢ籠められるかも知らないと云ふと、「けしからず。今はかけてもかかる事なのたまひそ。忘れざりけりと聞きたまはば、思しつゝむ事も出で來なむかし。亡き人の御代には、よろしう思されにしがなとこそ思はめ。」と云つてゐる。すべてが、かくの如くで、溫和的、消極的、無抵抗主義的であるので一貫してゐる。しかし、あまりに泥人形的で、

生氣が乏しいのは、作り物といふ感じが強い。尤も、夫の少將が、四の君の壻になるといふ話を聞いて、思はず可笑しがり、「さて。」と云つて笑つたのや、また夫が、右大臣の女の壻になるといふ噂を聞いて、嫉妬から久しく慰まない。夫がさま〳〵に云つても、うち解けない。などといふ處に、人間味が著しく見える。しかし夫が、「御心のゆかぬ罪を聞きあきらめつるこそ嬉しけれ。」「右の大臣の事なりけりな。」と云ふと、女君はたゞ、「そらごと。」と云つて笑つてゐるのは、猶微溫的の感が深い。

この女主人公に對しての北の方は、前述の如く、反抗的で、進取的で、愛憎の念が強く、妥協することが嫌ひ、負けることが嫌ひ、徹底的に自我を立てようとする女として描き出した。父の中納言は、常にこの人に驅使せられてゐる。北の方は落窪を憎んだが、都合のいい處には使ふ。三郎には、その人から箏を習はせる。それよりも上手な裁縫はます〳〵させる。費用入らずの職工と心得て盛んに使ふ。しかし、それの上手なのを藏人少將が褒めると、北の方はそれを傳へた人々に、「あなかま、落窪の君に聞かすな。心傲りせむものぞ。かやうのものは、屈せさせておくぞよき。それを幸ひにて、人にも用ゐられむものぞ。」と云つたが、その豫言は過たなかつた。異なつた意味で、姫君はずん〳〵發展して行つて、遂に、此方から保護を乞はなければならぬ程の

強さを得てしまつた。この人が驚かされたのは、石山歸の日の姫君の樣子であつた。更に驚かされたのは、姫君の向に居て、縫物の助手をしてゐる秀麗な若い男であつた。こんなものがついてはたまらぬ。殊に、「北の方、例の腹たてさせ給へ。」と云ふを聞くに至つては、もはや我慢が出來ぬ。たうとう、姫君を部屋に籠めるに到つた。併しこの計策は、卻つて姫君を幸ひにする機會となつて、その人の、その愛人の手に抱かれる事を早くしてしまつた。これから、蹉跌ばかりがつづく。四の君の垣取の際の縫物を命じるものがないので、「落窪といふもののあらば、うち預けて縫はせまし。佛これ生けらば來るやうにし給へ。」と負け嫌ひも折れるなどは、先づ滑稽である。清水詣の際に、少將から受けた侮辱はかなり甚しいが、しかし先方から、「戀りぬや。」と云つたに對して、「まだし。」と答へたのは、負け嫌ひな性格がよく發露してゐる。取代へた鏡の箱を還されて見ると、姫君の歌があるので、目も口ははたがるばかり驚いたが、「この年頃、いみじき辱をのみ見せつるは、くやつのするなりけり。」と甚しく先方を嫉視して、「かくさまざまに、ねたき答をせられぬる事を、いかでしてしがな。」何か報復をしようとしても、位置が已に顚倒してゐる。しかし猶、「花やかなる事は長からず。」衰運が敵の上に早晩來るだらうと思つても、中々に來ぬ。といふ中に、夫の中納言が病が篤くなつて、死後の處分をして、いいところは、皆姫君の方へ與へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

るやうにすると、悔しくつてたまらず、自分の夫も、「憎し、とく死ねかし。」とさへ思つてゐる。もはや、夫も子どもも、皆敵の味方になつて、自分はすつかり孤立してしまつたが、猶閉口しない。落窪の爲に、「何ばかりの德か我は見侍る。……落窪といひたらむ。何かひがみたらむ。」と傲語してゐる。しかし、遂に憑むところがないので、姫君の恩を受けるやうになると、「世にあらむ人、繼子憎むな。繼子なむ嬉しきものにぞありける。」と些か後悔はするが、むしろ目前の德を見て嬉しむのである。しかし尼にさせられたので、「魚のほしきに、我を尼になし給へる。產まぬ子はかく腹ぎたなかりける。」と思ひがけない不足を云つてゐる。負けじ魂は、終までまことに潑剌としてゐる。姫君よりは、直情徑行のこの方に、人間味が遙かに豐かである。作者は、姫君よりも此の描寫に成功してゐるやうである。

女主人公の落窪の君の、溫良貞淑なのに反して、夫の少將は、感情的で、反抗的で、幾分の義俠心があり、快闊であると共に執念深く、しかも惡謔を好む人として寫した。これと姫君とは、まことにいい對照である。更に北の方と對しても、配合の妙を示してゐるのである。少將は、帶刀の話から姫君に同情するが、不純の氣分も澤山含んでゐる。しかし姫君以外、遂に他の女をふりかへりもしないのは、當時の男子には珍らしいであらう。母北の方に、「またもゆかしう侍り。」

とは云つてゐるが、實は、この人一人のみを守つて、右大臣の女を勸める乳母に、「男の否といふことを、強ひさするやうやある。」と斷言してゐる。帶刀も、阿漕に、「この世には、御心うかるべきにあらず。」と云つて、安心してゐる。この姫君に對する愛情に反して、增すものは、北の方への報復心である。清水詣の際に甚しい恥辱を與へる。女君がとめても、決して止めない。「思ひおきしこと違へじ。」といふのが本性であるから、報復も徹底的である。祭見物の時にも、烈しい行爲をして、北の方を散々に困らす。夫の中納言はために出家しようとさへ思つた。典藥助に對しても、極めて酷烈で、遂に此の人が病死するまでに到らしめてゐる。猶更に甚しいのは、面白の駒を、自分のかはりに四の君にあはせて、處女を傷けさせたのみならず、その姉の夫の藏人少將をも離別せしめ、而して自分の妹の壻にする。更に又劵があるのを證據にして、中納言が多大の財を費して造作し上げた三條の家をも奪ひとる。そして、女君をもその家に連れて行つて棲まうとすると、女君は悲しむ。衞門督は、「渡らじと思すとも、まろ御達具し渡らむ。かく云ひたちて止まりたらむは、いとをこならむ。」と云つて、移轉してしまふのである。すべて、思ひ立つた事は直ちに實行に移す。而して微溫的、妥協的でないのが、この人の本質である。故に、これを女にすれば、とりもなほさず繼母である。作者は二人を描いて、實は一人を描いてゐるのである。

しかし、男は、報復が終ると變化する。それからは、極めて仁慈で、寛大で、模範的の善人になる。奪つた家も還す。子どもも贔屓する。中納言のために八講もすれば、七十賀をも催す。四の君にも、立派な壻を取らす。三の君をも、御匣殿にすゝめる。であるから、大納言も、「おのれは、おほやけもかしこくもおはしまさず。たゞ、あが君のみこそ、嬉しくかたじけなくおぼえたまへ。」と云つて喜ぶ。この故に、死に際しても、種々の物を大將に奉るに到つてゐる。この變化はあまり極立つてゐて、人を代へたかの感があるが、作者は、劇的氣分から、この前後の對照を以て、讀者の興味を起させようとしたのであらう。しかし、これは成功せず、不調和な事、木に竹を接いだ觀がある。

この大將の種々の報復を喜び、それの成功を祈つてゐるものは、阿漕である。阿漕は、姫君が落窪に居る時に、すでに北の方の處置を憤つて、報復を考へて居た。少將が通ひ初めては、無いものを有るが如く見せて、姫君の面目をつくろふ樣につとめる。伯母に無心をして、道具を借り食物を借るなど、苦心は實に慘憺たるものがある。從つて、姫君が部屋に籠められると、それを救ふべく、また努力する。この故に、姫君が少將に迎へられると、從つて行つて、少將のする報復を嬉しがる。女君は、それを怒ると、阿漕は、「衞門が思ふ限のことをせさせ給へば、實に御前

よりも、寶の君となむ思ひ奉る。」と云つて、會心の笑を漏らしてゐる。而して、いよ〳〵三條への移轉が濟むと、「思ふやうにめでたし。」と男君を思つてゐる。かやうに、反撥的、反抗的である阿漕も、卷の終には、殆んど何等の活躍をもせず、たゞ、帶刀の昇進に連れて出世して、遂に典侍にまでなつた、と云ふのみであるのは、作者の失念であらうか。阿漕に連れて、帶刀も活躍してゐるが、終は妻と同樣である。

父の中納言は、いはゆる好人物型に描かれて居る。北の方に引かされて、落窪の姫君に、夜の中に縫物をせずば、「子とも見じ。」と云つて怒るが、本心からではない。しかし、密男の低劣なのがあると聞くと、勃然と怒つて、「物なくれそ、しをり殺してよ。」と云ふ。面白の駒が壻となつたのを知つて、一旦は、「老の上に、いみじき恥見つる世かな。」と云つて憤るが、北の方の怒りを制して、「あしき事な宣ひそ。かかるものに捨てられぬといはれむは、いかゞはいみじかるべき。」と云つてゐるのは、世故に長けた老成の語である。しかし妻子が、屢侮辱を蒙ると、法師にならうと云ふが、さすがになり得ないのは、氣の毒である。また家を取られて、對手の敵し難いのを歎くが、これらは、皆子どもがした事であると知ると、「罪もなく、さま〴〵の恥も思ひ消え」て、道理は彼の方にある、と云つて釋然としてゐる。更に壻と子どもが、八講や賀をしてくれ、又大

納言になる樣にしてくれると、甚しく喜んで、生まれかはつて仕へようとまで云つて薨去する。この溫厚で、善良で、活氣の乏しい、反撥力のないのは、落窪の姫君と、男女を異にして、實は大體一致してゐる。作者は、こゝでも同型の人物を二人出してゐるのである。この中納言とよく似て、しかも違つて寫されてゐるのは、左大臣である。子の大將を信じ切つて何事も任せるが、孫の身上になると違ふ。第二の孫を愛して、自分の子と考へてゐて、長男が殿上すると、弟をも無理に殿上させる。「すべて、この子を、太郎にはせさせたまへ。」と奏して官位も勝らすやうにしようとする。偏愛な、堅意地な、しかし無邪氣な老人氣質を描き出して、極めて興味がある。

以上の外の人物で、姫君と同樣に、父中納言の氣風をうけついで、從順溫雅な越前守、主思ひの心から、權勢について無理に結婚させようとする偏固な乳母、輕浮な辨から落窪の君への文を賴まれなどしつゝ、いつしか忘卻して、少將にからかはれても思ひ出さぬ健忘な少納言、箏を習つてゐるところから、姫君を庇ふ四郎等、作者の人物の描寫は、頗る巧みなものである。主要の人物はともかく、彼處此處に隱見して端役たるべき人物を、性格によつて描き分けるのは、今日でも煩雜で困難である。それを、ある度まで、矛盾なく、齟齬なく、個々活躍とまでは行かなくとも、適當に描寫したといふことは、作者の頭腦の明晰で、注意の周到であるのを證するであら

う。

作者の頭腦の明晰、注意の周到の程度は、他の方面に於いても知る事が出來る。それは、全體の布置結構の上にもあるが、特に擧ぐべきは、照應の妙を極めてゐることである。作者の記憶力の缺乏から、又は單なる不注意から前後の矛盾衝突を起すのは、よくある事であるが、この作者は、一語を置けば、それに應ずべく、他の語を置く用意を忘れない。從つて自然に置かれた前出の語が、餘程の間隔を以て現はれた後出の語によつて、反映せられて、兩者相輔け、相補つて、布置を緊密にしたり、讀者の記憶力を喚起したりして、多大の效果を示してゐる。例へば、落窪の姫君が、石山詣に獨り殘されて居る事を述べて、出世して後、祭見物に頻りに誘はれるので、「かの石山詣の折、一人選り棄てられしも思ひ出でられて、心憂し。」と追懷に耽る。また義妹の壻取に縫物をしつゝ、他の女の壻の爲に、縫物を強ひられ、北の方や中納言に責められた記憶を喚起して、「著る人のかはらぬ身には唐衣たちはなれにし折ぞ忘れぬ。」と思ふ。これらは、姫君自分一個の上であるが、その受けた恥辱を他人に移して、部屋に籠められた事から、北の方等二人が、一つ車に寢てゐねばならなくなつたのを、「苦しきこと、落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし。」といひ、また落窪といふ名は、誰の事かと、少將に聞かれて、姫君が當惑するのから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo